

カレルの余白 須磨久善

命だけではなく、 人生を救う心臓外科医でありたい

須磨スクエアクリニック院長
須磨久善 Hisayoshi Suma

1974年、大阪医科大学を卒業後、虎の門病院に勤務。78年から心臓外科医としてのキャリアをスタートさせ、順天堂大学、大阪医科大学を経て、米国ユタ大学へ留学。最先端の技術を習得して帰国し、三井記念病院心臓血管外科部長、ローマカトリック大学心臓外科客員教授、湘南鎌倉総合病院院長、葉山ハートセンター院長、財団法人心臓血管研究所スーパーバイザー等を歴任する。2012年に須磨ハートクリニックを開院、'17年より須磨スクエアクリニックの院長として医療相談・セカンドオピニオンを中心に活動。順天堂大学心臓外科客員教授、香川大学医学部臨床教授も兼任する。主な著書に「タッチ・ユア・ハート」「医者になりたい君へ」等がある。

photo: Nobuhiro Miyoshi



心臓バチスタ手術をはじめ、日本初、世界初となる難手術に次々と挑み、成功させてきた須磨久善医師。「天才心臓外科医」「神の手を持つ男」など、世界中からあまたの賞賛の声を浴び続けてきた須磨医師は、どのように患者に向かい、どのように命と向き合ってきたのだろうか。その想いを訊いた。

「中学生の頃、私の夢はとてもシンプルで、自分が幸せになりたいというものでした。ただ、人と競い合うのは性格的に向いていない。それなら何をすれば幸せになれるのだろうか」と、部屋にこもって徹底的に自問自答しました。人に喜んでもらえる仕事をすれば、きっと自分も幸せになれるはずだ。医師なら、人と競争しなくても、自分の知識や技術で人に喜んでもらえる。そして、自分には医師の道しかないと思いついてしまったんです。医師になることがどんなに大変か、全然わかっていなかったんです(笑)」

この「思い込み」が、後に何千人もの命を救う心臓外科医・須磨久善を誕生させた。そして「のたうち回りながらも自問自答し、答えを導き出した」という当時の経験は、心臓外科医としての生き方の「原点」にもなったと須磨医師は語る。

「医師、特に心臓外科医は、患者さんの生と死に大きくかわかる仕事です。心身ともにタフでなければとてもやっていけない。なぜこの道を選んだか」という原点を明確に持っていたからこそ、それほど厳しい状況であっても、迷わず乗り越えてこれたのだと思います」

須磨医師が乗り越えてきたもの、その数や大きさは尋常ではない。86年には「胃大網動脈グラフトを使用した冠動脈バイパス」を開発。96年には日本で初めて心臓バチスタ手術を執刀。「手の施しようがない」とされた数え切れない患者の命を、須磨医師の手で救ってきた。と同時に、須磨医師が開発した数々の手術法によって、世界中の心臓病患者が救われてきたのだ。

「なぜ、こんなにしんどい仕事を続けているんだ



ます。ドラマや映画などでは「神の手」が脚光を浴びますが、どんなに天才的な医師が手術をしたとしても、麻酔から目覚めた瞬間に元気になっている

ことなんて、現実にはありえません。術前と術後にも、ありとあらゆる手を尽くしているからこそ、元気に退院していただけるのです」

実際、須磨医師は驚異的な手術の成功率を誇るだけでなく、術後の合併症発生率は全国平均よりもはるかに低い。そしてその経験と功績は、現在しっかりと後進に受け継がれている。須磨医師自身が「もし自分が心臓病になったら、手術を任せられる」と信頼する、何人もの弟子を育てたのだ。

「現在私は、セカンドオピニオンを中心とするクリニックを開設し、国内外、各地の患者さんからの医療相談に応えています。残念ながら、しなくてもいい手術をしたり、適切でない手術を受けて辛い思いをしている方が大勢おられます。しかもその多くは、医師の未熟さや説明能力の欠如によるものです。私はこれまでのキャリアの中で、大学や病院、研究機関などの枠組みを超えて、数多くの有能な医師たちと交流を持つことができました。そのおかげで、最適な治療方針を提案し、しがらみ抜きに最良の医師を紹介できます。私自身はメスを置きましたが、おそらく以前と同じように、患者さんの人生に救いをもたらしているのではないかと、そう信じています」

ろう。そう思ったことはありません。けれど、出会った患者さんの手術を断ったことはありません。これは無理かもしれないと迷いながら手術したことは一度もありません。いつも「絶対助ける」という確信を持って手術をしてきました。ただの思い込みや向こう見ずで、難手術に挑戦してきたわけではありません。自問自答しながら、これ以上できないというくらい入念に準備し、結果には全て責任を持つ。何があってもやり抜く。それら全てを含めての確信であり、挑戦なんです」

人の生死をあずかる医師が「自分の名誉」のためにメスを握ってはいけない。日本初や世界初の功績も、目の前の患者を救おうと尽くしたことの結果でしかないのだ。

「私にとって、心臓外科医という仕事は「天職」なのだと思えます。私は心臓外科を専門とする以前から、外科医として様々な臓器に触れてきました。どれも大切な臓器であることに変わりはありません。それでも私には、心臓と手術室で対峙したときの印象が、ほかの臓器とは明らかに違うように思えるのです。患者さんの胸を開き、ドクンドクンと脈打つ心臓がばつと顔を出すと、生命そのものと対峙しているのだと感じます。そして、ずっと手を入れて温かい心臓に触れると、心臓との対話が始まります。『やっと会えたね、君のことはよく分かっている。大丈夫だ、絶対に治してあげるからね』と。もちろん、自分の力ではどうにもならないことがあると分かっています。手術後に、思いがけない合併症が起こる可能性もありますから」

そこは祈るしかない、須磨医師は言う。手術を控えた朝は必ず寺社へお参りし、患者の



して、「ご家族と一緒に退院される日までずっと見守る。そこまでのストーリーを事前にしつかりイメージしておくことも、医師の重要な仕事だと思

